

●タミル社会の男と女

伝統の顔と近代の顔

田中雅一

●ジャフナ半島

スリランカ北部に位置するジャフナ半島は、スリランカ最大のマイノリティ集団タミル人の中心的な居住地である。この狭い半島にスリランカに住むタミル人総人口のおよそ四割にあたるタミル人が集住し、農民カーストのヴェッラーラを中心とする独特のタミル文化と社会体制を築きあげていた。ジャフナはスリランカのタミル文化のふるさとである。

しかし、ジャフナはけっして外界から取り残された孤立社会ではなかった。一六世紀からキリスト教会が進出していたこともあって、近代的な西洋教育を受ける機会がスリランカの他の地域よりも高く、また土地が狭く農業には限界があることから、教育を受けようとする動機も強かったため、コロンボやマレーシアなどで高等教育を受けたタミル人たちが生活の基盤を築いてきた。した

がって、ジャフナは伝統の顔と近代の顔が共存している社会であった。

ただし、ことジェンダー（社会・文化的な意味での性別）に関して言えば、それは男女の隔離を原則とするきわめて保守的なものであった。ただし、この保守性も、キリスト教の影響を受けて一九世紀末に生じた禁欲主義的なヒンドゥー改革運動の成果——廃娼、妾の禁止など——だという主張もあり、単純にそれが古来からのジャフナ・ヴェッラーラ社会のジェンダーのあり方だと断じるわけにはいかない。

だが、どちらにせよ、政治・経済的力を手中にしたヴェッラーラ・カーストを中心とするジャフナの社会体制は一九世紀末から二〇世紀後半までほとんど変化しなかった。ヴェッラーラは少数派のタミル人として独立後国政におよぼす力を失うことになるが、ジャフナ社会にお

いてはその力を保持していた。こうしたヴェッラーラ体制が劇的に変化するのは、民族紛争が激化し、伝統的な社会体制が崩壊した一九八〇年代になってからのことである。

以上のことを念頭に、まず一九五〇年代のジャフナ・ヴェッラーラの男と女の世界を見ていくことにしよう。

●一九五〇年代初頭のヴェッラーラ・カースト

ヴェッラーラの間では、結婚以外の性関係は悪であるという倫理観が徹底している。さらにヴェッラーラたちは高等教育を受ける機会があり、また動機も強かった、と述べたが、それは正確には男性にのみ妥当することである。男性と女性は一〇歳頃から互いに意識しはじめ、女性は初潮が始まると完全に男性を避けるようになる。教育熱は高いが、ときには初潮が始まると共学の学校を離れる。年をとると少しは緩まるにしても、男性も女性も少なくとも公の場ではできるだけ接触を避ける。道を訊ねることもしないという。

女しか家にいない場合、男が訪ねてきたら女は家の奥から、いま誰もいないからまた後で来てくれ、と外に向かって叫ぶ。男の方も、とくに理由もなく女性のいる家

を訪ねるのは不埒な行為とみなされる。

こんな言い伝えがある。

「もしも女のいる家に理由なく訪ねたとします。一度なら、みんなあなたはその女に気があるんだと言うでしょう。二度目なら、彼女と懇ろになつていと言うでしょう。三度目なら彼女に子供ができたと言うはずです」

誰かに親切にするのも考えものである。彼の妻や娘に下心があると思われるからだ。反対に、女が男になにかものを頼むと、見返りにセックスできると解釈される。このため、本当にそのような気が女にないなら、ものを頼んだりはいしない。

低カーストのパッラやナラヴァールは外で働くので、ヴェッラーラの女性よりよく見かける。ヴェッラーラの女性は寺院に行くか、他の家で行われる儀礼に参加するときくらいしか家を離れない。買い物も男がすることが多い。にもかかわらず、ヴェッラーラの女性の方が低カーストの女性たちよりも身持ちが悪いと信じられている。彼女たちにさまざまな制限が課されるのは、それがないとひどいことになるから、というわけだ。

タミル社会では交叉イトコ同士の結婚を理想とする。

交又イトコとは関係する親同士の性別が異なるイトコを指す。したがって姉と弟の子供たちや、兄と妹の子供たちが交又イトコである。ただし、ここでいう交又イトコは厳密には系譜をたどって関係する特定の個人ではなく、交又イトコという範疇^{はんごう}に入る親族すべてを含む。詳しいことは省略するが、このため祖父母が兄弟姉妹である場合なども含まれる。交又イトコ同士は男女間でも性的な冗談が許される中で、性関係が生じても不適切とは思われていない節があるが、すでに記した男女の隔離のために、そうした接触そのものが実現することはほとんどない。

●一九八〇年代初頭の西海岸漁民カースト

次にわたしが一九八〇年代初頭に調査をした西海岸の村シャッティユール^{シャッティユール}の話に移ろう。ここはヴェッラーラではなく、身分がやや低い漁民カーストの村である。彼らも交又イトコ婚を理想とし、交又イトコ関係にある男女は親しげに冗談を言い合う。また、互いに相手のことで冷やかされたりからかわれたりする。この漁村では社会的・経済的な意味で、女性の自由や自立がより高いように思われる。

社会的には次のような慣習が女性の自立性の高さを保証している。まず、村内婚が一般的という事実だ。この村は回りをキリスト教徒や仏教徒、イスラーム教徒に囲まれ、ヒンドゥー社会からは孤立している。漁民カーストといってもほかの地域の漁民カーストと結婚することはほとんどない。交又イトコ婚を行う世界は近親との結婚が中心となり、それだけでも結婚前と結婚後の女性の地位が劇的に変化することはなく、結果として心理的な不安も少ないとされる。つまり、たとえ結婚が親の決めた相手であっても、幼い頃からの知り合いであることが多い。この村ではそれに村という地理的な制約が加わるときには近親でない場合であっても、村人であるからまったくの他人ということはない。

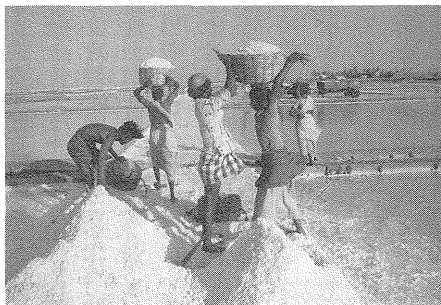
もっと決定的なことは、この村での結婚は妻方居住、つまり結婚後男性が女性の家に住むのが一般的なことである。したがって、女性は結婚してもまったく見ず知らずの他人と結婚するわけではないし、また不案内な土地に行くわけでもない。彼女に生じる変化は最小限におさえられている。たとえ新居を構えても、同じ村の中である。年に数回しか実家に帰れない、という状況は



結婚式の花嫁と花婿。



魚を分ける女性たち。



塩田で働く女性たち。

生じない。女性の地位を低くしている、とされるダウリ
 ー（持参金）の問題もこの村には存在しなかった。
 また、土地などの不動産がそれほど重要でないこともあ
 って、そもそも相続人としての子供の必要性を感じて
 いない。ある子供のいない老カップルに、「子供がないか
 ら離婚しようと思ったことはないか」と尋ね、反対に
 「なぜ子供がないと離婚しなければならないのか」と反
 問されたことがある。

経済的にはどうだろうか。女性が家にいて家事以外の
 労働はしないというのは理想として漁民カーストの人び
 とにも受け入れられている。しかし、この理想によって
 女性の活動が妨げられたりはしない。また漁業という生
 業が女性の労働を必要ともしている。たとえば地曳網^{じびきあみ}で
 とれた魚を仕分けするのは女性たちの仕事である。内臓
 をとって干し魚の準備をするのも、女性たちである。女
 性たちはまた魚を売りに外に出かける。中には干し魚を

大量に買い付け、内陸の定期市に売りに行く女性もいる。小さな筏いかだやモーターボートでとった魚は村の競市せりちに出されるが、ここに魚を運ぶのも女性たちである。さらに女たちはジャフナの塩田などに住み込みで出稼ぎに行く。九〇年代になると、村の近くの養殖エビの加工場でも女性たちは働き始めた。

●活発な女性たち

このように女性たちは未熟、練労働者として外で働き、生活を支える。地曳網の網子をしている男性よりも、塩田で働く女性の方が稼ぎがいいこともある。村で働く限りは危険もないし、性的な暴力にさらされることもない。ただし、村から離れた塩田などでの出稼ぎは、地元の男性との関係がしばしば噂になり、漁民カーストの人たちの間でも余裕があれば娘や妻をそういうところで働かせようとはしない。

漁民カーストの女性たちは、エネルギーでいきいきとしている。路上で大声で男と喧嘩をする。目つぶしにトウガラシの粉をまいたりして負けてはいない。夫婦喧嘩して出ていくのは夫の方だ。新居を構えていても実家はすぐ近くだし、働こうと思えばいつでも働ける。も

ちろん、こうした女性のあり方こそ高いカーストから見れば低カーストの低カーストたるゆえんとなる。彼らは地位が低いから女を働かせる、外に出す、彼らは貧しいから、男に甲斐性がないから女が働くのだ、ということになるわけだ。当の女性だって働きたくて働いているのではないかもしれない。

塩田で働いているジャフナの男性が、ジャフナの女性とジャッティユールの女性を比べて次のように言った。

「ジャフナで家を訪ねると、女性は声だけで返事をして顔を見せないが、この村の女性は包丁をサリーの下に隠して応対する」

この言葉にはジャフナの男から見た漁民の女のイメージが的確に表されていて興味深い。彼女は気丈で、危険を感じれば包丁で身を守る。しかし、ここには同時に、彼女らが粗野だという軽蔑の念も認められる。低カーストで貧しい女たちは、つねにこうしたまなざしにさらされている、といえよう。

働くということに価値を見いだし、それを女性の自立の基盤とする現代の思想から見れば、漁民カーストの女性たちを高く評価すべきかもしれないし、事実彼女たち

は村の中でかなりの自由を楽しんでいる。だが、それはあくまで村の中で、という条件付きだ。タミル社会において彼女たちはやはり周辺的存在におかれているのである。また村の中といっても、重要な決定を行う村会議から女性には排除されている。だから漁村の女たちの地位の高さは、あくまで相対的なものにすぎない。個々の関係では女はしばしば男より優勢だ。しかし、集団としては劣位にある。

同じ状況は、ジャフナ社会の低カーストの女性や高地プランテーションで働くタミルの女性たちにもあてはまる。塩田の賃労働と同じように、彼女たちの賃金は男性より低く抑えられている。しかし、同じコミュニティのなかで彼女たちもまた一家を支える存在として男性に依存する必要が低くなっているのである。

●一九九〇年代のLTTEの女性兵士たち

多数派のシンハラ人とタミル人との対立は一九五〇年代から強まっていたが、それが激しくなるのは一九七〇年代末、自由主義政策を唱えるUNP（統一国民党）が政権をとってからだ。一九八三年にはスリランカの近代史において最悪の事件とされるタミル人の大量虐殺が、

コロンボを中心に決行された。これに應える形でジャフナを拠点としてタミルの国（イーラム）独立を目指すさまざまな武装集団が組織され、インドで戦闘訓練を受けた。

しかし、こうした武装集団は相互に対立し、最終的に確固たる地位を築いたのは当初から最大の武装集団であったタミル・イーラム解放の虎（LTTE）である。彼らは海外のタミル人からの圧倒的な支持を受けて潤沢な資金力をバックに、政府軍と互角に戦ってきたと同時に、残忍きわまる内部粛清と政府の要人テロで勢力を伸ばしてきた。

ジャフナは彼らの支配の拠点であり、一九九五年まで外部勢力が容易に干渉できない世界であった。彼らの支配のもとで従来のヴェッラーラを中心とするカースト体制は崩壊し、LTTEによる新たな「秩序」が生まれつつあった。

LTTEの女性兵士たちは「独立の鳥」と呼ばれている。彼女たちはいま武装闘争をすることで、将来女性たちに有利な社会を作ることができると信じて疑わない。彼女たちは独立を目指し、独立後の平等社会の実現を求

めて武器をとる。女性兵士の数はけっして多くはないが、それでも死者に限っていえば、一九八二年から一九九一年までの一〇年間で死んだLTTEの兵士四三三三名のうち二九六名、およそ七〇％を占める。女性兵士の占める数は九〇年代になって増加しているのは確かだが、具体的な数字は不明である。

一九八三年にはLTTEに女性部隊が結成された。その際指摘された女性をめぐる諸問題とは、法律、宗教、不平等な権利、迷信、男性支配の社会制度、持参金（ダウリー）問題などで、これらの除去こそ女性の解放につながるという。また、女性部隊が取り組まなければならぬ問題として、（一）タミル人の自己決定権を保証し、民主独立国家を確立すること、（二）カースト差別や分離、持参金のような封建的慣習を撤廃すること、（三）タミル女性へのすべての差別およびその他の差別を除去すること、社会的、政治的、経済的平等を保証すること、（四）タミル女性は自分たちの生命を管理することを実にすること、性的暴力にたいして法的な保護を女性に保証すること、を挙げている。

ここで重要なことは、独立への戦いが第一の目的に挙

げられていることである。他の項目は直接武装闘争には関係しない。そして武装闘争について男女の区別はない。暴力を男性支配の顕著な特徴とみなす考えもここにはない。子を生み育てる女性は平和愛好者だとか、女性には聖なる力（シャクティ）が備わっているといった意識も認められない。女性についての本質主義的な観念を否定したところに武装闘争への道が開かれている、といえよう。これが、LTTEが少なくとも戦場で実現しようとしたジェンダー論の地平である。これはいわゆる銃後の母の世界の対極にある思想であるということは、明らかであろう。

そしてその先例はスバス・チャンドラ・ボース率いるインド国民軍の女性兵士たちであった。それがたんに女性の動員の口実にすぎないとしても、LTTEによって開かれたジェンダー関係の地平はジャフナの一九世紀以来の伝統的社会体制に真っ向から対立するものだ。いつの日かジャフナに平和が訪れたとき、LTTEによって提起されたジェンダーの理念が再び問われることになる。